

Title: Proposal to Add to UAX #45 Four Ideographs from Japan

Author: William T. Nelson

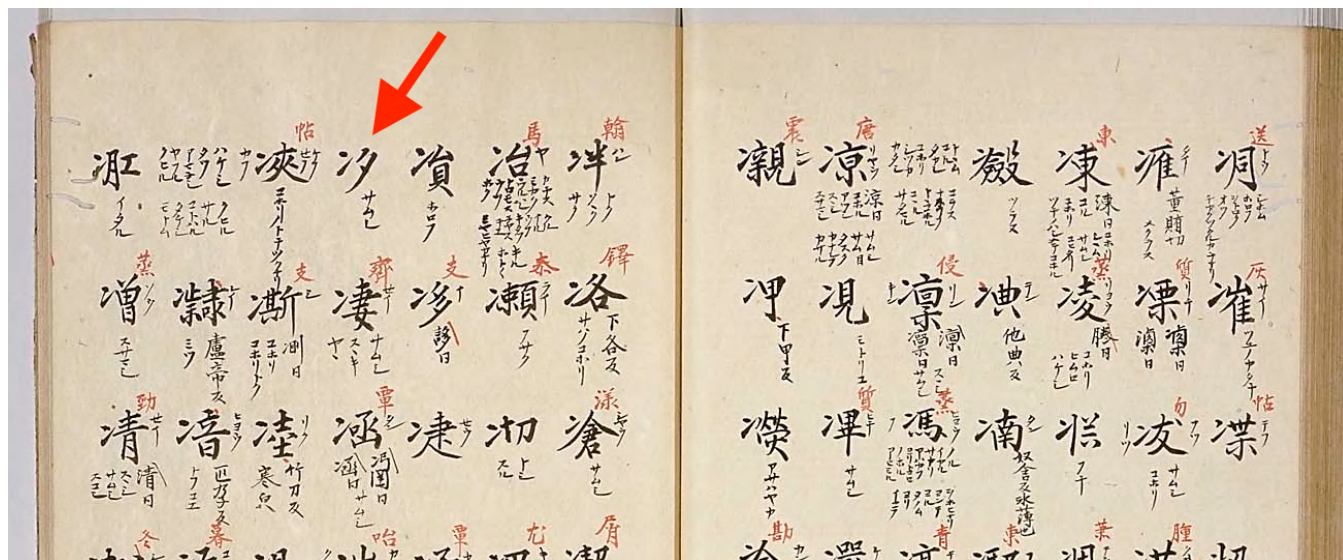
Date: 2020-01-07

This document is a proposal to add four unencoded ideographs to UAX #45.

Glyph	Source ID	IDS	RS	TS	FS	References
汐	UTC-03235	𠂔タ	15.3	5	3	TK01008510 和製漢字の辞典2014 177 稀少地名漢字リスト 長野県
均	UTC-03236	𠂔土夕	32.3	6	3	TK01018740
鼎	UTC-03237	𠂔晶ハ	86.12	16	2	Wikipedia ショウ王 Wikidata QID Q11308138
邇	UTC-03238	𠂔𠂔𠂔	162.27	31	1	和製漢字の辞典2014 2454

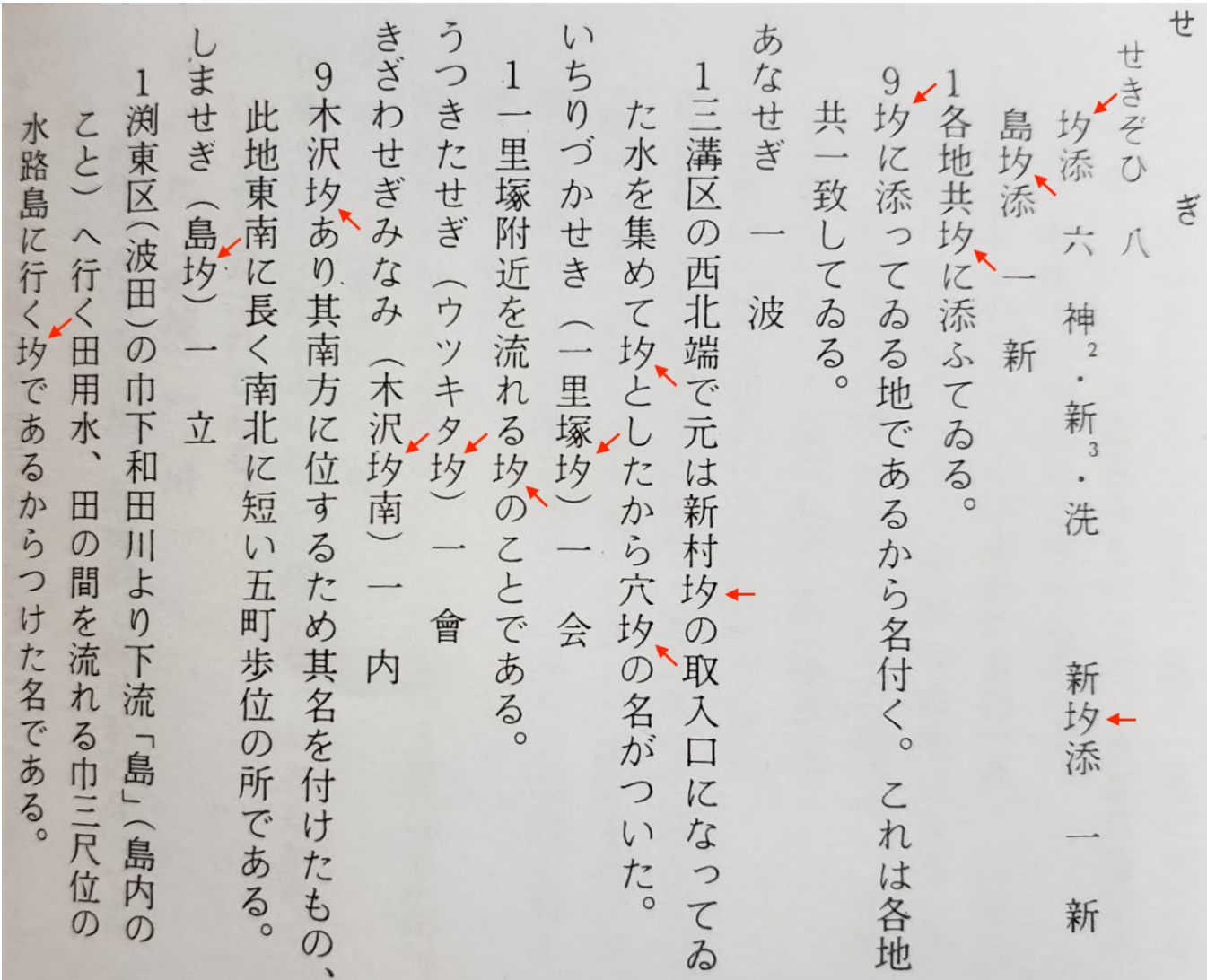
Thanks to GlyphWiki users kamiyo, kesuuko, tsuruki, and twe for creating the glyphs.

汐 UTC-03235



The source is 『龍谷大学本字鏡集』. The image is copyright Ryukoku University and can be accessed through the Art Research Center Collection, Ritsumeikan University ([link](#)).

均 UTC-03236



The source is 『東筑摩郡松本市塩尻市誌 別篇地名』。Twitter user ぽち (@pochi_0w0b) [posted](#) this image and comments about 「均」 and 「汐」。

ID	名前	フリガナ	論文名	置換した文字
43968	重野昭茂	シゲノテルシゲ	小穴芳美先生と烏川扇状地の地域史－用水＝での地域開発の歩みを中心に－（追悼・小穴芳実元委員長・小穴氏の研究を願みる）	均
44051	采＝晃	ワケミアキラ	南岳慧思と『法華経』－慧思後身説の背景－（シンポジウム・平安～鎌倉期における宗教心の転換－法華・太子・観音信仰－）	罌

This document ([link](#), page 6) shows 「均」 is used in the title of an academic paper.

均 UTC-03236 (continued)

ね、矢立の筆を取り出して漢詩を書き付けむが如くせば可なるべし。趣味の爲めにとて常の日迄不便にあるべきや。

第十六、漢字の地方字

支那在來の漢字にあらずして我國にて作りたる漢字を國字といふ人あり、例へば峠(たうげ) 峠(かみしも) 夙(もんめ) 畠(はたけ)の類これなり。

これに似て或地方のみにて用ひらるゝ文字あり、これを地方字と名づけむ、例をあぐれば松本市の近在にては堰の代りに土偏に夕といふ字を

四三

四四

書きたる文字(均)を用ひ、岡山地方にては「たを」(陵線の形)といふ語を表はすに山偏に乙といふ字を書きたる(乚)を用ふ。又富山縣の立山地方にては山偏に略したる辨の字を書きて「くら」(峠)といふ、蘆峯寺、岩峯寺といふ所あり。金澤の田舎に「めをと杉」といふ所あり、女偏に男といふ文字を書きて「めをと」とよむなり、尙尋ねれば數多あるべし。

かゝる地方文字の生ずることはその地方の風土、事物に適當なる文字の不足せるより起れるなり。されば朝鮮にもこの類あり例へば屋敷を朝鮮語にて「タイ」といふ、これを代の字の下に土の字を付けて書き表はし又水田を表はすに二字密着して書き、これを「タウ」といふ。字形「沓」に似

The source is 『榮ゆく文字』 ([link](#)). Twitter user @mashabow [posted](#) the source.

上將軍

騷擾ニ依
リテ任大
臣節會ヲ
御衰日ニ
行ハル

前參議從三位藤光顯、○葉出羽守、十一月十九日敘正三位、

〔師守記〕 一二十

貞治六年九月廿七日辛丑、天晴、今朝藏人右中辨宣方進御、
教書云、任大臣節會、御衰日被行例、可被注進由被仰下云々、○中略

任大臣節會、御衰日被行例、引勘候之處、○中略近則建武二年十一月九日丙寅、
(十脱カ)

被行同節會、左大臣藤原經忠、元前右大臣、今、公家御年四十八、御衰日、今日先

被行朔旦敘位、昨日依世間動亂延引、所見只今如此候、建武之儀、不及兼御沙

汰、若俄被行候歟、可令得其御意給候乎、仍言上如件、

九月廿七日

大外記中原師茂 狀

〔師守記〕 十三

十二月十二日 貞治元年 條

辨官募諸宮御給一級例、

宣明卿、○中門

建武二年十一月十九日敘正四位下、春宮御給、于時、左中辨、春宮亮、

足利尊氏直義鎌倉ニ反ス、是日、兵ヲ發シテ之ヲ討ズ、上將軍尊良親王、新

田義貞等東海道ヨリシ、鼎王、洞院實世等東山道ヨリス、

〔元弘日記裏書〕

建武二年十一月十九日、尊良親王以下東征、

〔神皇正統記〕

後醍醐天皇

○前文十八日、追討のため、中務卿尊良親王を上

將軍といひて、さるへき人、くもあまたつかはさる、武家よは義貞の朝臣

建武二年十一月十九日

七〇五

鼎 UTC-03237 (continued)

但馬宮令旨考

はじめに

南北朝時代とその前後は、親王以下、皇族が軍事・政治において顕著な活動を行ったという点で、日本中世史上、極めて特異である。

筆者は、建武年間に未曾有の出世を遂げた鼎王という皇族の出自と、その事績を明らかにすることを試み、建武期前後に後醍醐天皇の側に立って活動した皇族、但馬宮（四宮）・尾崎宮について検討を行い、次のように推測した。

・元弘三年（一二三三）、千種忠顕・赤松円心らと共に六波羅の幕府軍と戦った但馬宮は、後醍醐天皇の皇子ではなく、鼎王に比定される。

・『公卿補任』で「雅明親王」の曾孫とされる鼎王は、通説では、惟明親王（高倉院の三宮）の曾孫、尾崎宮に比定されるが、尾崎宮は、少なくとも父の代から美濃国と所縁があり、専ら美濃方面で活躍した。よって、鼎王とは別人であると考えべきである。

The source is 『但馬宮令旨考』 ([link](#)) by Professor AKASAKA Tsuneaki (赤坂 恒明).

【俗名】

俗名は「**富**、**親王**」であったと推定される。

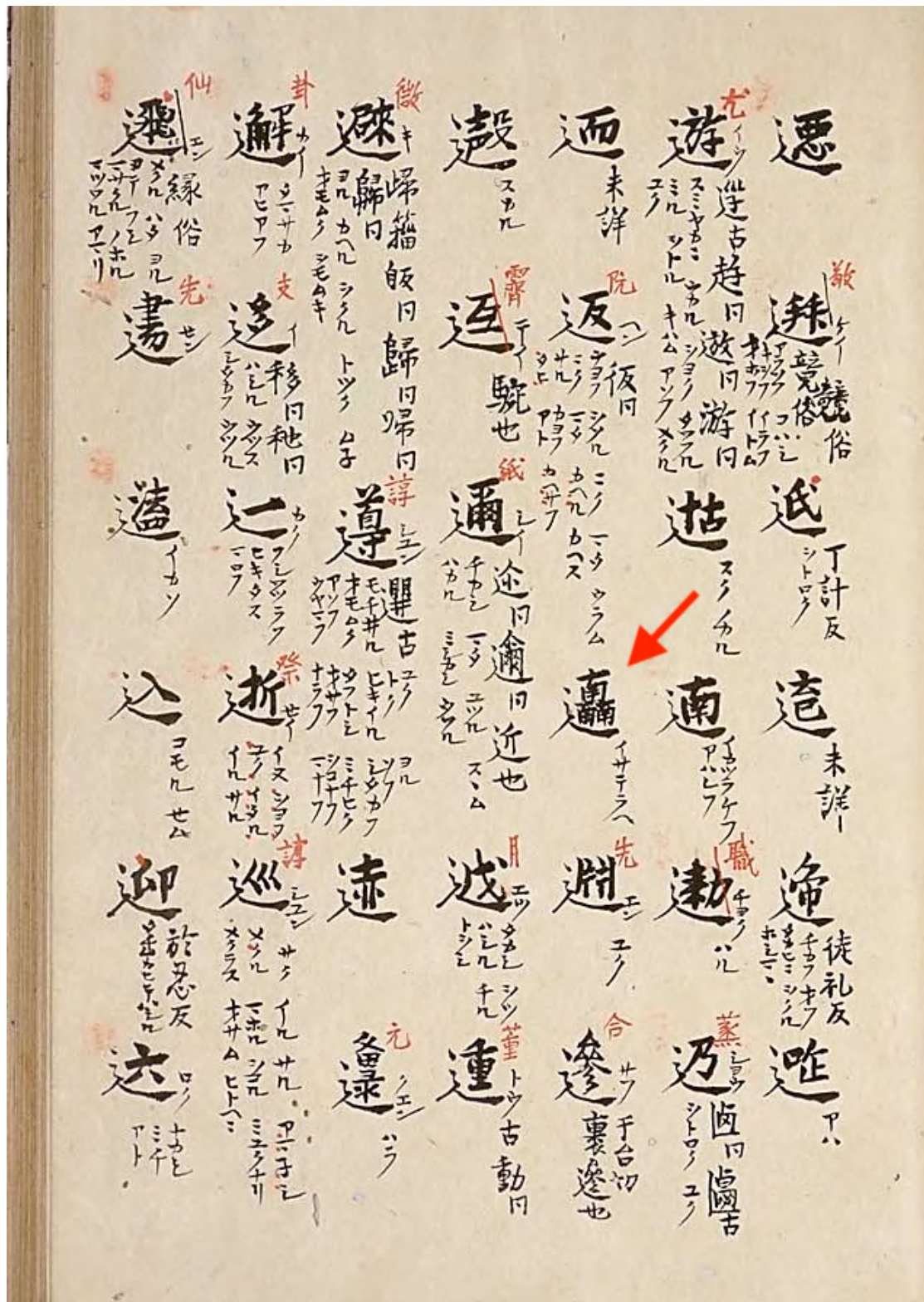
三千院所藏『帝皇系圖』に熙明親王の子として見える「**富明王**」と同一人であろう。

※ 赤坂恒明「**■【品々】**王考」712頁 註(15)

従って、俗名は「**富明親王**」か。

※ 『天龍寺重書目録』乙 貞治六年十月三日付六人部庄庄主・都官請文に「前鎌倉將軍家式部卿宮御孫子五辻親王家（御發體以後自被號祥益庵主）」と、また、『天龍寺重書目録』乙 應永十七年六月廿七日付六人部庄本主次第に「前鎌倉將軍家式[部]卿宮孫子五辻親王家、自號祥益庵主」とあり、祥益が親王であったことが知られる。

This example is from a website ([link](#)) that references Prof. Akasaka's work.



The source is 『龍谷大学本字鏡集』。The image is copyright Ryukoku University and can be accessed through the Art Research Center Collection, Ritsumeikan University ([link](#)).